

食品安全委員会小泉直子委員長殿  
厚生労働大臣小宮山洋子殿  
文部科学省大臣中川正春殿

## 低線量被ばくについて、どの程度のリスクなのか、国民にわかりやすく伝えて下さるよう要望します。

食のコミュニケーション円卓会議

代表 市川まりこ

2011/12/13

文部科学省が11月30日に学校給食の食材に含まれる放射性物質濃度「1キロ当たり40ベクレル以下」との目安を示し、給食の基準を示したとの誤解を招いた問題で、1日に「検査機器の選定の目安で、給食の基準ではない」と再通知した後、一転して6日の閣議後会見では中川正春文科相が「(40ベクレルという)検査機器の検出限界値が、新しい基準値が示されるまで、各自治体の判断の参考になるものとする」と発言しました。40ベクレルの目安について、文科省は「政府が食品中の放射性セシウムの年間被ばく限度を5ミリシーベルトから1ミリシーベルトへ引き下げる検討を進めていることを参考にした」と説明しています。

今回の混乱を招いたそもそもの原因は、食品安全委員会の放射性物質の食品健康影響評価結果にあると考えます。「食品からの追加的な被ばくについて放射線による健康への影響が見出されるのは、生涯における追加の累積線量として、おおよそ100ミリシーベルト以上である」と言うだけでなく、より高い線量、より低い線量でのリスクも評価されるべきだったと考えます。そのリスクの大きさを推定して、放射性物質以外の様々なリスクと比較しつつ、社会として許容できるか、どのリスクに優先的に対応すべきかを検討するようなリスク管理に役立つ情報でなければ、リスク評価の意味はありません。

食品中の放射性セシウムの年間被ばく限度を5ミリシーベルトから1ミリシーベルトへ引き下げるといふ、その「1ミリシーベルト」のリスクはどの程度なのか？ 基準の数値は妥当なのか？ そういう冷静な議論抜きで、どんな小さなリスクも一切許容できないという感情からの「とにかく規制値を下げて」という声に流されてしまえば、生産者や事業者には過剰な負担を強い、消費者には無用の不安を押しつけることとなります。消費者がリスクを受け入れるかどうかを自分で納得して選択できるように、政府には、低線量被ばくについて、どの程度の大きさのリスクなのか、もっと具体的に国民にわかりやすく、根気強く語りかけて下さるよう、重ねてお願い致します。